

アシカと 仲良くなりたかった



写真/文 鍵井靖章
青いヴェータ⁰⁶ Photo Column

www.web-lue.com

今、メキシコはバハ・カリフォルニアのラパス沖の洋上にいる。昨年に引き続き2年連続で「月刊ダイバー」の取材でやって来た。今日は、クルーズ船で最北上したラスアニマスというエリアでダイビングを行ってきた。お目当てのハンマーヘッドシャークには出会えなかったが、愛嬌のあるカリフォルニア・アシカと楽しい時間を過ごすことができた。

ラパスはとても思い出深い場所である。1998年に私はモルディブから帰国し、フリーランスのフォトグラファーとして独立した。当時、平凡社の「アニマ賞」という動物写真家にとっては登竜門的な賞を受賞したばかりで私は大変鼻息が荒かったものの、仕事はほとんどない状態だった。実際、週刊誌に写真を掲載しては、その日暮らしをしていた。そんなある日、「月刊ダイバー」の堀田編集長(当時)から連絡を頂いた。「特派取材の計画を考えている。行き先はラパスだ。とにかく、取材協力先である旅行会社「クラブ アズール」に行って、自分のこれまでの掲載誌などを持ってアピールするべし」という御達しが出了。私は言われた通り掲載誌を何冊も持ち、クラブ アズールの青木社長に会いに行ったことを昨日のように覚えている。ラパスの海の虜になった。

初めての依頼取材だったために、何をすれば良いのかわからなかった。ただ良い写真を撮影しなくてはいけないことは分かっていた。まず、水族館でしか見たことないアシカのあの素早い動きを止めるには、大きなストロボが必要だと私は考えた。以前、伊豆で働いていた頃の先輩である下司さん(現ボンソ・ダイバーズ代表)に連絡してニコンのスピードライトSB-104という一番大きなストロボを2灯借りた。それに付随するパーツなども新宿の「アンサー」で買い揃えた。金銭的な負担も大きかっ

たが、気持ちはどこまでも高く澄み渡っていた。

約300匹のアシカがいくつかのコロニーを作るロス・イスロテスというポイントで、私は初めて野生のアシカたちとご対面した。私が一番最初に行ったのは、大きなコロニーを仕切る「ブル」というポストアシカに私を認識してもらうことだった。「ブル」はまだ未成熟の子供たちを守るために、あまりにも接近するダイバーに向かって激しい威嚇をする。場合によっては噛み付きもする。そのことを最初に教えてもらった私は、「このコロニーで撮影する許可を下さい」と、撮影も始めずに、「ブル」の関心を引こうとしていた。「ブル」は約2.5mで寸胴の巨体を持つ。おでこが飛び出て迫力のある顔面をしている。正直、堪らなく怖かったが、その後の撮影をスムーズに行うために私は必死だった。前に回りこんでは一方的に懇願した。私は相当必死だった。結果、そのような行為は無意味だったと思われるが、いくつか思い通りの撮影をすることができた。特に、その時の1枚は週刊誌「フライデー」で連載するきっかけとなり、敏腕編集者に「銀鱗の花火」と名付けられた。

今年もまた、アシカたちに翻弄されながら撮影を続けている。もうブルには無間にも近づくことが……。

明日は思い出の地、ロス・イスロテスでのダイビングが計画されている。昨日になってやっと、このラパスを包括するコルテス海が、他の海よりも塩分の濃度が高く、塩っ辛いということを自覚した。海水が目に入るとショボショボとして開けることができない。これまでは、そんなことを気づきもしなかった。アシカたちを追いかけて撮影することはいっぱいあった。これからは、他の海よりも少し身体に纏わりつく水を感じながら、もっとアシカたちと仲良くなりたい。

9月26日2006年 フィエスタ・キャビンNo.7にて

※「ヴェータ」とはサンスクリット語で「知識」もしくは「科学」を意味する

©WEB-LUE ウェブマガジンの二次配付および画像・文章の複製、二次使用を禁じます

Web-lue 2006. Winter